



●発行：宗教者9条の会・大分 ●〒879-5102 由布市湯布院町川上 3561 見成寺 TEL 0977-84-2257 FAX 0977-84-5203

「沈黙の歴史をやぶって」を観て

大分メノナイト・キリスト教会 牧師 佐々木淳二

I
「宗教者9条の会・大分」では月に一度の学習会を行っている。ここ三回はビデオを観ている。

今回観たものは「沈黙の歴史をやぶって」

これは2000年12月、東京で行われた「女性国際戦犯法廷」の記録である。

世界15ヶ国、1300人の傍聴人が見守る中、開廷が宣言された。

検事団が日本軍の犯した罪を次々と告発していく。学者たちは、その証拠文書を次々と明らかにしていく。

日本軍の性奴隷とされた従軍慰安婦たちが、残虐行為の事実を切々と訴えて行く。また勇気を振り絞って自らの加害体験を語る元日本軍兵士たち。

いよいよ首席検事による論告。その後、

裁判長による衝撃の判決文が朗読された。

歓喜に沸き返る場内。涙を流して喜ぶ各国の被害女性たち。

圧巻の64分だった。

慰安婦に関して、安倍首相による「強制性を裏付けるものはなかった」発言をきっかけに議論は沸騰しているようだ。

また、この3月をもって慰安婦への償いを目的とした「アジア女性基金(理事長・村山富市)」は解散したという。

何とはなく聞いていたニュースであったが、どこか遠い国の話のように感じていたことは否めない。そんな私の心の目を、これは開いてくれた。当日配布された資料のなかにはビデオの申し込み書があったので、迷わずこれを注文することにした。

II

正義のための戦争というものはなく、すべての戦争が罪悪である。

悪魔に心を奪われた人間は、そこであらゆる悪を行う。どこまでも残酷、残忍である。そんな戦争によって被害を受け

るのは、いつだって女性たちなのだ。それが戦争というものの実態である。

宗教者とは、自らが内包する、そんな醜い罪の姿を深く自覚し、神や仏に救いを求めた者たちではないのか。

罪から救われた私たちが、『罪』そのものでしかない戦争に反対することは当然である。

先月、一般公開された『あなたになら言える秘密のこと』は、旧ユーゴスラビアの内戦で被害にあった女性の物語だ。

映画監督イサベル・コイシエさんは次のように語っている。「戦争の結果はどの国でも、どの時代でも同じ。被害者が求めるのは正義と、自らの体験に耳を傾けてもらうこと」

慰安婦とされた彼女たちの求めているのもこれと同じではないだろうか。

しかし、それは今ままであまりに軽視されてきたと言わざるを得ない。この国に正義が実現するように。彼女たちの声に耳を傾ける者がたくさん起こされるように祈ろう。何よりもまず、私たちがそのひとりになって行こう。

しかし戦争となれば、また同じ悲劇が繰り返されるのだ。同じ被害者は必ず出る。だから、どんなことがあっても平和は守らなければならない。

憲法9条は、絶対に守らなければならないものである、と信じている。

ファシズムや全体主義は、権力者が人びとを一方向的に弾圧し、恐怖政治をしることによって成立するだけではありません。高橋哲哉

日本国憲法 第9条

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

高橋哲哉さんのこと

真宗大谷派 日野詢城

はじめての出遇い

始めて高橋さんにお会いしたのは、湯布院の「コムニティセンター」であったと思う。町のお母さんたちが中心になって『心のノート』を巡る問題を学習するために頂いた時でした。その時、高橋哲哉という人の名前すら知らなかった私でしたが、『心のノート』は気になっていたので、一番前に座ってお話を聞かせてもらい、幾つかの質問もしました。講演会のあと、「亀の井別荘」で交流会がもたれ、いろんな事をおたずねしました。話題が「元日本軍慰安婦問題」になり、『ハルモニの絵画展』のことに話題が集中することになりました。97年、98年、韓国のハルモニが描いた絵画を展示し、会場ごとにさまざまな企画を盛り込んだ『ハルモニの絵画展』を全国規模で行いました。スタート地点は湯布院の美術館「空想の森」。その後、沖繩から北海道までを縦貫しました。NHKのプロデューサーであった池田恵理子さんたちが中心となり取り組まれたもので、「従軍慰安婦問題」を多くの人に知ってもらい、日本の戦争責任を問うものとして開かれたものでした。スタート地点となった湯布院会場でのスタッフもその席に何人かいて、話は盛り上がり、夜遅くまで話し込んだことを覚えています。

次にお会いしたのは、公民館の一室でした。湯布院にお泊まりだという情報があり、『教育基本法』の改正？問題についての最新情報を少しだけでも聞かせてほしいということと、「ローカルネット」の浦田龍次さんが呼びかけたものでした。20名足らずの少人数でしたが、状況は緊迫していただけに長時間の報告を頂くことになりました。その時、肩をポンとたたかれ「やっぱり来てましたね」と言われ、嬉しくなったことを覚えています。



「3人の軍人 あの時、あの場所で」キム・スンドク

『茶色の朝』（大月書店）のメッセージ

始めてお会いしたときに買ったのが『茶色の朝』です。絵本のような本で、帯には「フランスで2003年ベストセラー第1位」と書かれ、「自分らしく生きることへの恐れが、勇気に変わりました」という女子大生のことばが大きく書かれています。

『茶色の朝』の原作はフランスの心理学者フランク・バヴロフが子供向けに書いた本。アメリカの映画監督で画家でもあるヴィセント・ギャロが描いた線画がふんだんに盛り込まれ、思わず手に取ってみたくなる装丁でもあります。

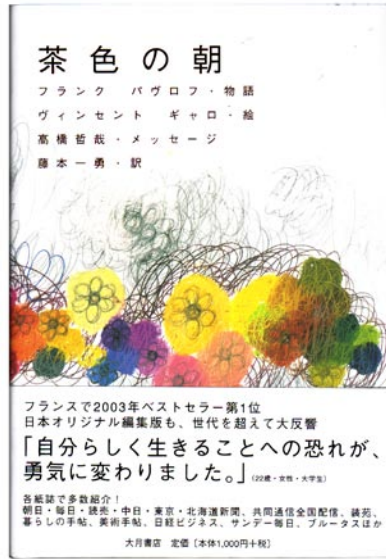
「やり過ぎさないこと、考えつづけること」というタイトルで高橋哲哉さんのメッセージが12ページ付け加えられ、2003年12月に日本語版の出版となりました。朝日、毎日、読売、中日などの新聞で大きく報道されると共に『暮らしの手帖』や『サンデー毎日』などの機関誌にも特大の書評が載せられています。

高橋さんはメッセージの中で、「コーヒーをゆつくり味わいながら、時の流れに身をゆだねておけばよい、心地よいひとときを享受できる平和な国。この国にひとつひとつ、ものごとを『茶色』に染めていく出来事が起こっています」と警告しています。それでも「茶色にまもられた安心、それも悪くない」とやり過ぎしているあいだに、「茶色党のやつら」が、全体主義的な法律や施策をつぎつぎに課してきたとしても、それらのひとつひとつは、ただちに日常生活の「安心」や「安全」を全面的に奪い去るものではありません。…それに適応していけば、さしあたり「安全」は保証され、ひとまず「安心」が取り戻されることになるからです。

音もなく忍び寄る全体主義の恐ろしさと、私どもの心の変化「慣れていく怖さ」、この本が見事に描き出しているのは「私たちのだれもがもっている意

慢、臆病、自己保身、他者への無関心」の怖さだと解説されています。

「やり過ぎしてしまわないこと」へ思考停止をやめて、考えつづけること」それが『茶色の朝』を迎えないための道だといえます。



哲学する人・行者・行人

哲学者と聞いた時「難しいのだろうな」と勝手に思い込んでいた私がいきました。それを見事に破ってくれたのが高橋哲哉さんでした。

仏教学とか宗教学というものは、やっぱり難しいも「だ」という思い込みが私の中にあり、学んだことのない哲学はきつと難しいものだというイメージがありました。だから、高橋さんのお話は難しいのだからと覚悟して出かけたのが初回の出会いでした。僧侶である私は仏教や宗教の知識を積み上げ

ることに熱中した時代があったように思います。大衆時代に遊んでばかりいたことへの後悔と焦りもあり、ともかくより多くのことを知ろうとし、理屈ばかりを並べ、質問をされるとさらに理屈を付け加えるというやり方をしていたことを思い起こします。やりとりされているのは、それこそ「業界内」の言葉のやりとりでしかありませんでしたが、それはそれなりに面白く、何かやっていると気分になるから危うい」のだと思います。

そうしたやり取りとは異なる「宗教」に出会ったのは30代の半ば過ぎであったのかと思います。その頃から少しずつ「靖国問題」や「戦争責任」の問題が気がかりになり始めたのですが「怠慢と臆病、自己保身」が常に足を引っ張り、議論しても「業界内」という有り体であったように思います。その後少し勇気を持って外へ出るようになって『茶色の朝』で指摘される心を引きずりながらの私であることには変わりはありません。

そういう私にとって「哲学する人」という言葉が「そこにいた」というのが、高橋哲哉さんでした。毎日新聞の「クローズアップ2004」で高橋さんは「この国に新しい国家主義が台頭しつつあると感じ、人間として恥ずかしいという気持ちになって」今の流れに違和感を感じる人たちの抵抗の拠点となるようなNPO法人を立ち上げ、季刊誌『前夜』を創刊した。とコメントしています。

宗教者にとつて「哲学する人」というのは特別なことではなく、仏教の言葉でいえば「行者」という

事なのだと思えます。志をもつて生きる人・深い思慮のもと生きる人の姿ということでありましょう。そしてそれは、すべての人がどこかにもつている「もう一つの心」を偽らずに生きようとするることなのだと思います。

2000年ほど前に出られた中国の僧、善導という人が「二河の喩え」といわれる教えを説いています。「人有りて西に向かつて行かんと欲するに」という言葉で始まるその喩えには、志をもつて生きることの困難さが説かれます。「悪意があつてお前を止めるのではない」と「そんなことをしたらお前は殺されるぞ」と仲間が止めに入る物語です。でも、「行くも死、還るも死、住まるも死」だと知つた行者は、「前に向かつて行かん」と決意するのです。すでに道がある、この道を歩んだ人がいるのだと。そして向こう岸から呼ぶ声も聞こえる。という喩えです。すべての人が何かの志を持つときにぶつかる壁の話だとも言えます。最初にぶつかるのは自己保身、次にぶつかるのは周りとの関係、最期にぶつかるのは先が見えない不安。そんな狭間に私たちは生きています。

「再び過ちは犯しません」というのは、被爆者の祈り。憲法9条は、20世紀に起こった世界大戦の幾千万の戦争犠牲者の祈りでもありません。

右派だと自認していた自民党の古参の議員さんが「いつの間にか左派になってしまった」とつぶやく昨今、『茶色の朝』は紛れもなく忍び寄っているのです。

第三回 公開講座のお知らせ

私たちは望みを棄てない

講師 高橋哲哉さん

東大大学院総合文化研究科教授・哲学者

日時 5月13日(日)

午後1時30分より4時

会場 コンパルホール 多目的ホール

現代世界の様々な問題について、深く鋭い思索と問題提起を行っている。2004年秋NPO法人「前夜」をたちあげ、季刊誌『前夜』を刊行。「破局前夜が新生立前夜となる、戦争前夜が解放前夜となる、その希な望みを、私たちは棄てない」と宣言する。

著書に『心と戦争』『曼文社』『歴史の修正主義』(台誠書房)

『靖国問題』(ちくま新書)などがある。

『靖国問題』は30万部を超えるベストセラーとなり、話題となっている。「心のノート」をはじめ教育基本法の改正問題、憲法改正問題等に積極的に関わり、多忙なコメンテーターとして新聞やテレビにも出演している。昨年から今年にかけて、イタリア・アルゼンチン・韓国・アメリカ・フランスなどに招かれ、精力的な講演活動を続けています。

交流学習会

戦争こそは、人類が避けんと欲すれば、何所でも避けられるものである。(藤井日達)

「07広島・阿蘇平和巡礼」との交流会

期日 5月19日(土)

4時〜6時

会場 見成寺 湯布院町川上

電話 0977-841-2257

アメリカよりユタ州パユエテ族の先住民、ニューメキシコ州のアパッチ族の先住民、ベトナムの復員兵、イラン戦争復員兵、9/11遺族の会など、アメリカから12名の参加者を迎えての交流会となります。20日間の巡礼の期間中、5月19日は私どものために特別に日程調整をして下さいました。一人でも多くの方が「生の声」にふれて頂ければと思います。どなたでも参加できます。お誘い合わせお集まり下さい。

次年度の年会費納入・カンパをよろしく
お願いします。 年会費3000円



世話人(◎代表者)

- 無着成恭 曹洞宗 泉福寺
- 喜迎天信 日本山 妙法寺
- ◎日野詢城 大谷派 見成寺
- 林 正道 大谷派 安養寺
- 西郡 均 本願寺派 誓岸寺
- 古谷 聡 大谷派 蓮照寺
- 佐々木淳二 大分メソヂスト教会
- 掛橋泰定 日蓮宗 妙栄寺
- 藤田宏紀 パプテスト連盟大分教会
- 大在 紀 本願寺派 長光寺

編集後記

昨年末「愛国心教育」が条文に盛り込まれた新「教育基本法」が公布・施行されました。そこには旧法の第2条に規定された、「自発的精神を養う」という文言が削除されています。旧法は、戦後日本国憲法が施行される一ヶ月前に制定されました。憲法の本質が具現されるには教育の力が基本となることへの揺るぎない確信の現れでしょう。新法はどのような憲法を生み出そうとしているのでしょうか。

「日本国憲法の改正手続に関する法律案(国民投票法案)」が衆議院を通過しました。読売新聞が三月に行った世論調査では憲法改正賛成が「46%」で、非改正派「39%」を上回っていますが、改正派のポイントは三年連続で減少しているそうです。逆に非改正派は上昇しています。全国の「9条の会」の草の根運動がわずかですが実を結ぶ兆しも見えます。

「宗教者9条の会・大分」の講演会は、高橋哲哉さんをお迎えして来月5月に行われます。第一回は無着成恭師の「憲法って何ん?!」と題した講演でしたが、今回は「私たちは望みを棄てない」です。予断を許さない状況をよく言い表していますが、今が一番大事な時を迎えていることでもあります。多くの方のご参加とカンパを宜しくお願いします。